

氏 名 村尾 静二

学位（専攻分野） 博士（文学）

学位記番号 総研大甲第 1018 号

学位授与の日付 平成 19 年 3 月 23 日

学位授与の要件 文化科学研究科 比較文化学専攻
学位規則第 6 条第 1 項該当

学位論文題目 「護り」の身体技法に関する映像人類学研究
ーインドネシア・ミナンカバウの事例からー

論文審査委員 主 査 助教授 川口 幸也
教授 大森 康宏
助教授 福岡 正太
教授 山中 速人（関西学院大学）

論文内容の要旨

研究の目的

マレー文化圏には、身体技法に基づく護身の技が広く分布する。その名称は各地域により異なり、型や動き、その目的や社会的意味づけも一様ではない。

本研究は、その源流のひとつを築き、実践者の地域的広がりにおいて他の地域をしのぐ、インドネシア、スマトラ島中西部のミナンカバウ人社会、行政上は西スマトラ州内陸部のタナ・ダタル県を調査地を選び、「シレ (silek)」という名のもとに伝承されている身体技法を調査対象とした。

撮影調査に基づくフィールドワークをおこない、また、自らその修行に参加するなかで、シレをかたちづくる型と動きを丹念に映像記録し、身体や時空の使い方に注目するなかでその仕組みをとらえた。

また、技を狭義の意味に限定することなく、その実践や伝承が社会のなかに広く浸透する身体技法をとらえることにより、当地のアダット（慣習）や宗教実践といかなる関係を築いているのか、シレの技法の文化的意味を、日々の修行や儀礼の観察を通して考察した。

以上は、撮影調査と映像の観察を通して導きだしたものである。調査映像は他の研究者や調査地の人々が、その内容を共有することができるよう編集し、『「護り」の時空ーインドネシア・ミナンカバウの身体技法シレ』（撮影・制作 村尾静二、DV形式、38分、2006年）という題名の映像民族誌を制作した。

各章に基づく論文の内容

第1章では、上記の研究目的に続き、先行研究、調査地の概要、撮影調査の過程を記述した。そして、本研究が着目する映像の特徴と活用方法を次の三つの点にまとめた。

- (A) 映像は実証的な記録と再現を可能にする。これにより技の時空をとらえる。
- (B) 調査地の人々と調査映像を視聴し、そこで得られた視点を研究に反映させる。
- (C) 撮影者の意図を超え映像に写りこむものにも注意を払い、対象を観察する。

第2章では、シレが技法がインドネシアにおいて形成されてきた過程を概観した。インドネシア、西スマトラのミナンカバウ、そして、ミナンカバウの内陸部に位置する本研究の調査地という三つのレベルからその歴史をとらえることにより、この技法がもつ歴史の重層性をとらえた。

第3章では、シレの修行がなされる場である、イスラーム礼拝所を考察した。この礼拝所はスラウと呼ばれる。母系制の慣習をもつミナンカバウ社会では、各母系氏族集団がスラウを運営し、若者たちはそこで毎日、夕方から翌朝まで共同生活を送るなかで、礼拝、コーランの読誦、そしてシレの修行につく。

第4章では、スラウにおける日々の修行を考察した。修行参加に関わる諸条件や修行の過程そのものを、調査映像をもとに具体的に記述した。続いて、クマンゴ流の技の要である「古式」をとりあげ、その技術的側面とそこに込められた社会的・宗教的意味をとらえた。この型はクマンゴ流の総ての動きの基本であると同時に、そこにはアダットとイスラームの教えが象徴的に込められている。

第5章では、この技法がもつ社会的・宗教的意味をとらえるために、二つの儀礼をとりあげた。「系譜を護る儀礼」では、スラウの人々は、宗教上の教えの系譜にある師範の靈廟を参詣し、一同が「古式」を実技奉納することで師弟の絆を強める。「安寧祈願の儀礼」では、彼らは慣習的信仰に基づく邪悪な精霊から心身を護るために、シレの稽古場で供犠の儀礼をおこなう。ここでは、シレの技法は人間にではなく、超自然的な存在に向けられる。

第6章では、この技法を、個人・社会・宗教の相互作用のなかに位置づけることでそれまでの議論を整理した。修行者たちは、慣習的な信仰とイスラームの戒律に基づいて技の習得に励む。現在ミナンカバウでは「アダットはイスラームを基礎に置き、イスラームはコーランを基礎に置く」状態が理想とされており、本調査地のスラウをみちびく導師ブヤの言葉をかりれば、そのなかにシレの技法があるのである。

結論にあたる第7章では、第6章までの考察に基づき、本研究の結論および今後の課題を提示した。映像を通して明らかにしたこと、および、それを論文のどの章で考察したのかを整理している。

本研究の可能性

映像のなかに文化とらえ、後世に向けて記録すること。映像を通して自身が属す社会をとらえなおしていくこと。そして、彼ら自身が映像記録の手段をもち、記録した映像を保管すること。これは、当該社会の人々の願いである。そのためには、現地の博物館や大学を基盤として、映像のアーカイブを築き、映像を現地に残すことが重要である。また、それにより、彼らはみずからの手で映像による比較研究をおこなうことが可能となり、たとえば、インドネシアのプンチャ・シラットのなかにおける、ミナンカバウのシレの重要性を探ることができるのである。一方、海外の研究者は、映像のアーカイブを訪れることで映像を共有し、そこから対象文化に関する新たな視点を獲得することが可能となる。

撮影した人と撮影された人がともに映像を共有し、アーカイブと映像による比較研究の基盤を現地社会のなかに整えていくこと。これは、現地社会に生きる人々と、そこで長期にわたるフィールドワークを経験したわれわれ研究者が共同して取り組まなければならない課題である。

論文の審査結果の要旨

本研究は、インドネシア、西スマトラ州のミナンカバウ人社会において護身術として伝承されている身体技法「シレ」を取り上げ、それが彼らの文化の中でどのような意味を担っているかを、映像人類学的手法により解明しようとしたものである。

ミナンカバウ人の宗教実践は、「ムスジッド」すなわちモスクと、各母系氏族集団が運営する礼拝所「スラウ」のふたつで営まれており、後者は、シレの修行の場にもなっている。本研究は、ミナンカバウ人の共同体ナガリに根ざすスラウに焦点を当てて、そこで、シレの流派のひとつであるクマンゴ流の修練と伝承がどのように行なわれているかを、映像と論文により考察し、その本質に迫っていく。

まず、全編 30 分に及ぶ映像を通して、調査地とその人々の生活の輪郭に触れ、次にスラウでのシレの修行を克明に描き出す。また、導師にインタビューを重ね、修行に励む人々の表情を追いながら、シレが単なる護身術ではなく、歴史的な重層性を背景にミナンカバウ人の意識と生活全般に深く関わっていることを示していく。

他方、論文は 7 章から構成されている。第 1 章で、先行研究、調査対象地の概略を述べ、同時に、とくに本研究で映像人類学的手法を採用することの必然性を説いた後、第 2 章ではシレの歴史の全容を概観し、第 3 章でシレの実践の場であるスラウの歴史の全体像に分け入って、さらに本研究の調査対象となった K スラウの特徴を具体的に挙げる。その上で、スラウがナガリに息づくアダット（慣習）に深く根を下ろして、そこで行なわれるシレの修行とは、しばしば言われるようにイスラム的規範の修得と実践であるだけでなく、16 世紀のイスラム化以前から伝わるアダットの修得と伝承でもあるという事実が浮き彫りにされる。第 4 章ではシレの修行の実際を入門から日常の訓練にいたるまで描写し、またさまざまな技、とくに「古式」といわれる一連の技の型がどのようなものであり、いかなる意味を有しているかを論じている。そして第 5 章では、視点を変え、護身術ではなく儀礼としての側面に光を当てる。こうした議論を踏まえて、第 6 章から最後の 7 章にかけて、シレの今日における状況を多面的に捉えた上で、シレの修行が、アダットとイスラムの宗教的、倫理的規範をひとつに総合したものであり、そのことはとくに古式において端的に表現されており、したがって古式を中心としたシレを伝え、学ぶことは、つまり、アダットとイスラムをアイデンティティの基盤とするミナンカバウ人の存在の根幹に関わっていると結論付けている。

身体技法としてのシレの修行の実際を映像がゆたかに語り、それがミナンカバウ人社会において持つ倫理的及び宗教的規範としての意味を論文があらためて掘り下げる。本研究は、映像とテキストが車の両輪となって展開される映像人類学の特質を十分に活かして、シレという身体の技法が、単にそれにとどまるものではなく、慣習とイスラムに根ざしたミナンカバウ人社会の文化の本質であることを描き切った労作である。ただ、アダットとイスラムをやや不用意に対比しているきらいがあり、両者の関係、とくに 16 世紀に外部から入ってきて、その後優勢を占めたイスラムの、アダットに対する権力性に関する踏みこんだ議論がほしかったし、映像により民族誌を描くという営みの固有の意義と可能性をもう少し強く訴える余地はあっただろう。これらの点については、今後のさらなる展開に期待したい。

本研究が、映像人類学的手法を用いたインドネシア文化の研究史において画期的な学術的意義を有していることは明らかであり、審査員全員が一致して学位を授与するに値すると判断した。